



幻の人食い虎

「水滸伝」に描かれた人を食うと噂する猛なトラは、
今や絶滅の危機に瀕し、まさに伝説になろうとしている。
そこで重慶動物園へその雄姿を拝みに行った。

野中章弘

1953年 兵庫県生まれ。アジアをフィールドに活字、写真、ビデオによるレポートを続ける。著書に「沈黙と微笑」「糞と絆」など。早稲田大学、東京大学講師。アジアプレス代表。

重慶では三日ほど動物園に通ったお目当てはトラである。華南虎といつてつ猛なトラが飼われているというのである。「水滸伝」にも人食いトラを退治する話があり、やはり中国に来たからには一度は人食いトラの雄姿を拜んでみたい。華南虎は中国にしか生息しておらず、個体数は300頭あまり。将来はパンダなどよりはるかに希少価値の高い動物になるといつ。これはもう期待していいのではないか。

トラは重慶動物園の一等地に放し飼いにされていた。居住区といえるほど広い敷地を与えられ、まさにパンダと並ぶVIP待遇である。



飼育係の楊中銀さんになでてもらいご機嫌の華南虎

透明のアクリル板越しに中を眺めると、いかにも精神そうな面構えのトラと2匹のヤギが見えた。どうやら哀れなヤギたちは生き餌らしい。これはむじいトラがヤギを食らうところを観客に見せるのか。幼いころ、私の家ではヤギを飼っており、その乳を飲んだ記憶がある。その恩あるヤギを生きたままトラに食わせていいの。そのような残酷な光景を直視する勇気が私にあるだろうか。

しかし、初日は結局、何事も起こらなかった。翌日、ヤギはもう食われたかもしれないと案じつつ、トラを再訪するとまだヤギの姿はあった。2時間ほど待っている

と、ついに決定的瞬間がやってきた。トラがヤギを追い始めたのである。恐怖で全身金縛りとなったヤギは、卒倒したように地面に転がってしまった。心臓はドクン、ドクンと脈打っているのに、身体は硬直してヒクリとも動けない。もう一巻の終わりである。

ところが、である。肝心のトラはヤギを軽くいたぶるだけで一向にキバを立てる気配がない。そのうち、飽きてきたのか、ヤギを放り出して池の方で水浴びなどを始めてしまった。

なぜ食わないの？

私がこの情景の意味を理解したのは、トラがもう1頭のヤギと対面したときである。このヤギはトラがやつてくると足を踏ん張り、正面からトラの目をじっと見据えたのである。そうしたら、なんとトラはくるりときびすを返し、ヤギに背を向けたまま、シャーと放尿したではないか。これは負け犬のしぐさだ。ヤギよりも弱いトラがいたのか。なんとも情けない。信じがたい光景である。私のそばにいた中国人たちも、「なんと臆病なヤツだ！」と嘲笑しているではないか。また



くの笑いものである。

飼育係の楊中銀さんに尋ねると、野性の本能を失わないためにヤギを放しているものの、食うなどということはもうできないというのである。「水滸伝」にあるような人食いトラは、見たことも聞いたこともないという。もともと人には害のない生き物らしい。中国ではトラは体の大きなネコにすぎない。

それにしても、可哀そうなのは、ヤギたちである。食われはしないが、毎日の命の縮む思いをしている。ヤギに同情する私を見て、楊さんは、見世物としては刺激的でしょう」と愉快そうに笑ったのであった。

